

三 浦 貞栄治

故郷にはその土地にふさわしい山があつて、そこに生まれ育つた人びとの心の支えとなつてゐる。「津軽富士」といわれる岩木山も津軽の人びとには、故郷の空になくしてはならない存在になつてゐる。そしてこの岩木山を語ることなくして津軽の風土を説明できなくなつてゐるが、いざ改まつて岩木山と津軽の生活について述べようとしてみると、その余りにも遠大なお山の容姿に、ただ、手をこまぬいてしまふことが多い。

『岩木山信仰史』では「津軽の支配、統一にはどうしても岩木山を支配し、味方につけなければうまく治め得ないということが底流をなしている」と述べてゐるが、昔の岩木山と津軽の人びとのつながりを適切に表現したものといえる。その信仰内容について著者は宗教的専門分野から鋭い分析を試みてゐて、岩木山をとりまく津軽の民間信仰について貴重な研究方法を示してくれた。

読後、特に強い印象を受けたことは、筆者が自分の足で歩いて来て調べた強さが、真摯な態度で書かれた文章の端々に伺うことができるということ、またその調査範囲が津軽、東北地方のみならず、関西地方まで伸びてゐて、それが著者の深い仏教的な素養とあいまつて、内容にずっしりと重みを加へてゐることである。

岩木山信仰を宗教史的な視点に立つて考察し、天台密教・修験道・

神仏混淆など、日頃我々の知りたい事柄について、系統的に解説してくれるのがこの著書であり、身近な疑問点の一つ一つを解明してくれる楽しさを読者に与えてくれる。しかも、狭い地域内で釈明しがちな地方文化を中央文化（比叡山文化）の伝播との関連のもとで究明しようとする方法は、今後、その類の研究により調査の仕方を示してくれるものと思われる。

『岩木山信仰史』という書名にふさわしい内容の盛り上がりは、比叡山文化の地方への影響を宗教史のふるいにかけて述べているところと、更に筆者がその豊かな仏教的学識をもって岩木山信仰を一つ一つ丁寧に説明しているところである。一般には年中行事、芸能等について断面的にしか言及できないのに、孤峰岩木山の裾をひとまわりして、寺社及びご神体の推移を追いながら、お山信仰の史的变化を明らかにしようとしてゐるのがこの著書の特色といえる。

前編の伝説・年中行事の記述は沢山の資料を引用してゐて、その考察の広がりを見せて興味をわかせる。お山参詣の風俗的説明は『昔の農村』（佐藤末吉編）の文を引用しているが、当時の参詣風景が誠に克明に、しかも表現力豊かに記されてゐて、これを取り上げた筆者の慧眼に感服した。

中心は比叡山文化の地方への伝播であり、天台宗の東北地方への影響について論究した部分である。これは岩木山信仰のみならず、津軽地方の宗教について語る場合にも参考になることであり、津軽に住む人びとが座右の書として一読すべきものではないかと思う。生活の中の岩木山についていろいろと見聞し、記録して来た他の民俗学の研究

書とあわせて読むと、この著書の価値が一層増すことであらう。

巻尾に掲載している原資料は、これから調べようとする人びとへの著者の配慮とも思われ、また豊富な写真と図版は読者の理解を助けてくれるものである。今後、これに啓発されて、民俗芸能史、津軽地方の諸信仰等についていろいろな人が調べて発表されることを期待したいものである。

(B六判、本文二〇六頁)

定価九八〇円、北方新社刊)